



TOPIC

- ・事務所ニュース
- ・事務所からの連絡
- ・From Project / 永野純子 専門家
- ・ボランティア通信 / 木下由佳 隊員
- ・離任挨拶
- ・My Favorite / 山田幸企 企画調査員



事務所ニュース

ダルフル及び暫定統治三地域人材育成プロジェクトー保健（母子保健）分野TOTの実施！



7月4日から2週間に渡って、南コルドファン・青ナイル州のヘルス・ビジターを対象にした指導員育成(TOT)がセナール州で行われました。セナール州のマザーナイル・プロジェクトで確立した研修を他州にも展開するというものです。ヘルス・ビジターは、通常ヘルス・センターにおり、村落助産師を監督・支援する役割を担っています。2週間にわたる研修の最後には試験があり、合格した研修生にはファシリテーターの資格が与えられました。南コルドファンからは、10名が参加し、7名がファシリテーターに、残り3名がアシスタント・ファシリテーターに、青ナイル州からは9名が参加し、6名がファシリテーターに、残り3名がアシスタント・ファシリテーターに認定されました。今後、それぞれの州に帰って、村落助産師を対象とした研修を計画・実施してもらう予定となっています。詳細はJICA事務所担当、西本まで。

マザーナイル・プロジェクト・フェーズ2 案件形成に関しセナール政府と協議



7月4日、現在セナール州で実施しているマザーナイル・プロジェクト(母子保健プロジェクト、以下MNP)の次の段階、MNPフェーズ2の形成について、セナール政府と協議し、ミニッツが署名されました。これにより、セナール州政府のMNPフェーズ2に対する前向きな意向が確認されました。フェーズ2では、村落助産師、ヘルス・ビジターの研修にとどまらず、母子保健を取り扱う病院や郡保健局などを巻き込んだチームワークを強化するとともに、MNPで構築した「セナール・モデル」を北部スーダン全州に展開することを目指す内容となっています。詳細はJICA事務所担当、西本まで。

「ダルフル及び暫定統治三地域人材育成プロジェクト」給水関連機材引渡し式典 開催！



7月11日、ハルツームにある国立水公社研修センター(PWCT)のキロテンワークショップにて、ダルフル3州への給水関連機材の引渡し式典が行われました。これは、2009年6月から始まった同プロジェクトと技術プロジェクト「水供給人材育成プロジェクト」の連携によって実施された井戸管理コースの終了に伴うものです。当日は和田大使からのスピーチが行われ、スーダン側と日本側関係者に労いと機材の有効活用について期待が述べられた後、関係者によって署名がなされました。スーダンでは、これまで井戸の修理をするよりも新しい井戸を建設する方法が主流であり、そのため機能せず放置されたままの井戸がたくさんあります。同研修コースにおいては井戸管理の計画策定、計画の履行、モニタリング等についての指導がなされ、今後は訓練を受けた各州の水管理公社の人々によって、今回の供与機材が持続的な井戸の使用に活用されることが期待されています。詳細はJICA事務所担当、松岡まで。

8月の予定

- 事務所からの連絡
- 8月1日(日) 高橋典子 在外専門調整員 離任
  - 8月2日(月) 北部食糧生産基盤整備計画準備調査 調査団来訪(～9月8日)
  - 8月3日(火) 大嶋健介 企画調査員 <ジュバフィールド事務所> 離任
  - 8月4日(水) 戸田陽一郎 専門家 <ダルフル及び暫定統治三地域人材育成プロジェクト・職業訓練指導> 離任
  - 8月5日(木) 「ガダーレフ州シェリフ・ハサバラ村における母子保健サービス強化プロジェクト」プロジェクト開始式
  - 8月10日(火) 岩岡未佳 隊員 <青年海外協力隊・栄養士>、木下由佳 隊員 <青年海外協力隊・理学療法士> 帰国
  - 8月11日(水) 五十嵐幸雄 企画調査員 休暇(～9/12)
  - 8月12日(木) 中元則晶 専門家 <ダルフル及び3PAプロジェクト・計画策定/実施支援/モニタリング> 離任
  - 8月13日(金) 松岡秀明 企画調査員 休暇(～8/24予定)
  - 8月15日(日) 池田精寿 専門家 <ダルフル及び3PA人材育成プロジェクト・給水施設維持管理指導> 離任



プロジェクトの関係者の方々から、スーダンで活動する中で感じるさまざまな思いや発見などを綴っていただくコーナー。

今回は、マザーナイルプロジェクトの永野専門家です。

## 地域の母子保健を支えるスーダンの村落助産師

フロントライン母子保健強化プロジェクト

(マザーナイルプロジェクト)

母子保健専門家 永野 純子

マザーナイルプロジェクトは、ハルツームより約400キロ南にあるセナール州で活動しています。活動分野は母子保健の中でも、地域の妊産婦の人々に最も身近に寄り添う村落助産師(Village Midwife、以下VMW)の能力強化、およびVMWの活動を支えるネットワーク強化や保健システムづくりです。プロジェクト期間は2008年6月～2011年5月(3年間)で、現在はプロジェクト最終年です。

「VMWとはどういう人？」とよく聞かれます。日本では現在、出産の99%は医療施設で行われていますが、スーダンでは自宅出産が全体の70%を占め、国の政策で、「One Village, One Village Midwife」という制度があります。医療施設や人材が十分ではない村では、VMWは出産に限らず、女性のリプロダクティブヘルスや地域住民の健康を支える存在として大きな期待が寄せられています。こうした背景をふまえ、プロジェクトではセナール州にいるVMW 全員への現任教育(7日間のリフレッシュ研修)を実施しています。VMWの大半は、1年カリキュラムのVMW養成学校を卒業して以降、ほとんどスキルアップの機会がなかったため、マザーナイルの研修に参加することで(長い人だと数十年ぶりに!!)、新しいトピックの基礎看護や助産技術を学んでいます。



研修風景1: 助産モデルを使って妊婦健診の実技を練習。

VMWの多くは読みかきができません。そのため、研修内容は実技に重点をおき、一人づつモデルを使って、妊婦健診、出産、産後ケアの練習をしたり、ロールプレイなど多様な手法を取り入れています。また、VMWは必ず「助産キット(村での出産介助に必要な器具・消耗品が入っている箱)」を持っていますが、研修の機会を活用し、キットの中身をチェックし、不良品の回収や不足の器具の補充をおこないます。こうして、7日間の研修を終えたVMWたちは新たに学んだ知識とスキル、そして充実したキットを持ち帰り、各々の村で「より安全で清潔な母子継続ケア」を提供する存在として活躍し始めていることと期待しています。



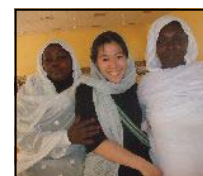
プロジェクトのロゴ。このロゴのついたアイテムを、皆大事そうに使っています。

2011年1月にはセナール州のVMW全員(600名)が研修を終える予定です。VMWが研修で培った能力が地域の妊産婦ケア向上に貢献されているのに関しては、プロジェクト終盤に向けて今後検証する必要がありますが、「分娩介助の器具の殺菌・消毒、手袋の使用を徹底するようになった」、「医療施設での妊婦健診を手伝うようになった」、「家族計画など研修で学んだテーマの住民教育を行っている」と話すVMWが増えていきます。

また、研修を通じて寝食を共にした研修講師(Health Visitorと呼ばれる、VMWの業務を定期的に支援・指導する立場の助産師)との関係構築が強化され、各々が所属の医療施設も確認されたことで、研修後もVMWが定期的にフォローアップを受けながら、地域の母子保健を支える最前線の人材として活躍していける仕組みが強化されることを目指しています。



研修風景2: 家族計画のテーマで住民への啓発教育のロールプレイを実施。男装するVMWもいて、毎回演技は白熱する。



永野 純子

ながの じゅんこ / 千葉県出身。助産師。2008年7月より、スーダン北部セナール州に駐在し、本プロジェクトに従事。スーダン生活でのお気に入り、セナール州保健省近く、ナイル川沿いで楽しめるリバーサイドランチ(揚げ魚定食)。雨後のフルーツが豊富な季節を、いつも楽しみにしている。

## 木下由佳 隊員(理学療法士・ハルツーム教育病院) の1日



「ボランティア活動は何より楽しい！」と話す木下隊員。

これまで木下隊員は、シリアでの青年海外協力隊(2年間)、バングラデシュでのボランティア活動など、多くのボランティア活動を経験してきました。そんなボランティア活動大好きな彼女が現在奮闘中の活動現場、ハルツーム教育病院・理学療法科におじゃましてきました！

ハルツーム教育病院・理学療法科にて、同僚の理学療法士助手約20名と共に、日々患者さんにリハビリテーションを指導している木下隊員。理学療法科の日常業務を補佐しながら、同僚である理学療法士助手の技能向上を目指すことがおこなわれる活動です。

この理学療法科にやってくる患者さんは、主に骨折や腰痛、脳血管障害、末梢神経損傷といった症状の方々とのこと。以前は物理療法が中心だったのですが、木下隊員が赴任してからは運動療法や日常生活活動に適したアプローチを多く取り入れるようになりました。



活動の大きな柱の一つが、同僚である理学療法士助手の教育。というのは、理学療法士“助手”(注1)である同僚たちは、正式な療法士ではないため知識や経験が十分ではありません。

以前は、一方的に患者さんの関節を動かす訓練をするだけだった同僚たちが、体操を覚え、患者さんに「家でも継続して行うように」と指導するようになったそうです。

配属先内の課題のひとつとして木下隊員が感じていたのが、医師と理学療法士助手の距離。理学療法科には医師と理学療法士が数名いるものの、実際にリハビリテーションの指導をしている理学療法士助手との連携が効果的にとれていませんでした。そこで木下隊員は、医師と助手の間のコミュニケーションを促進するように、医師へ働きかけを始めたそうです。



↑タオルを使った器具  
→リハビリテーション  
指導のポスター  
(木下隊員作成)

また、医師の要請に沿って、週に数回、入院中の重度の患者さんに対するリハビリテーション指導も行っています。退院したら、そうそう通院できない患者さんも多いため、家族にもリハビリテーションを指導します。



英語とアラビア語を自在に操り、医師、同僚、そして患者さんとしっかりコミュニケーションをとりながら、たくましく活動している木下隊員。忙しく活動する合間を縫って、インタビューしました。

**広報:**活動していて、うれしいとき、やりがいを感じる時はどんなときですか？

**木下隊員:**元気になった患者さんの笑顔を見るときですね。たとえば、5か月前には歩けなくて車椅子を使用していた少年が、リハビリを経て、杖がなくても歩けるようになったんです。その子がとてもうれしそうだったのを見て、私も本当にうれしかったです。

**広報:**スーダンの理学療法分野における現状・今後の課題について教えてください。

**木下隊員:**ハルツーム教育病院はハルツームの中でもリハビリテーションが受けられる病院として知られています。しかし実状は外来リハビリテーションに偏っており、重度の患者さんに対するリハビリがほとんど行われていません。外来で通院しているのは、肩や腰の痛み、軽微な骨折など症状が比較的軽く自分で移動が可能な方です。一方、入院患者の場合、整形病棟で手術が終わると、適切なリハビリもないまま、次に手術を待つ人のためすぐに退院しなければなりません。退院しても、リハビリを受けられる転院先もありません。たとえば、今週は男性病棟50床のうち10人が銃で撃たれて骨折した患者さんでした。中には脊髄を損傷して下半身が一生動かない方もいます。こうした重度の患者さんがリハビリテーションなしに、そして障害者支援のサービスなしに今後どのように暮らしていくのかと考えるととても辛くなります。

**広報:**なるほど…。今後正規の理学療法士の方が増えて、リハビリテーションの重要性が認識されることを願いたいですね。最後に、何かと運動不足になりがちなスーダンJICA関係者のみなさんへ、手軽にできるストレッチを紹介してもらえませんか？

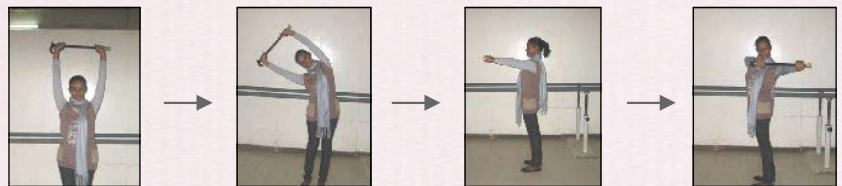
**木下隊員:**では、五十肩(肩関節周囲炎)予防のストレッチをご紹介します！

### ～五十肩(肩関節周囲炎)予防ストレッチ～

五十肩の主な原因は肩の動きに負担がかかるためですが、予防には肩のストレッチだけでなく、体(体幹)の柔軟性が大切です。肩を痛めやすい人は普段の動き方に問題があります。肩と体を一緒にストレッチする簡単な体操で肩の痛みを予防する方法を紹介します。

家ではタオルなどを使ってストレッチします。

- ①肩を上げて背中を伸ばします。  
そのまま側方に移動します。
- ②肩の高さに両腕を上げて体を回旋させます。



どちらの運動も体幹・肩・首を一緒に動かします。ゆっくりと動きながら最後の可動域で止めます。よくストレッチできたと感じるまで数回繰り返します。

注1)スーダンにおいてリハビリテーションはまだ新しい分野。4年前にリハビリテーションの学校ができ、今年初めての卒業生が誕生する。現在スーダンで働く理学療法士の多くは、アジアや中東の学校を卒業した人々。作業療法士、言語療法士などの学校は、まだない。

# 離任 挨拶



## 荒木京子 専門家 (「ダルフル人材育成プロジェクト/病院品質管理のための5S活動」)

2009年10月末よりシャトル型の派遣で計6ヶ月間、ダルフル3州保健省およびそのモデル病院関係者対象のTQM(Total Quality Management)-5S(整理・整頓・清潔・清掃・しつけ)研修をハルツームおよびセナール州で実施して来ました。研修会場をお貸しいただいたOmdurman Maternity病院(副院長は私のスーダン人姉?妹?)にはすっかりお世話になりました。帰国したらターミナ、フルが懐かしいと思うでしょう。



## 斉藤 正和 専門家

### (「水供給人材育成計画プロジェクト」)

PWCTの「井戸管理」研修実施能力向上のための業務を行ない、各州の水道技術者からの、継続的な維持管理活動への熱意も感じることができました。彼らの能力向上に少しでも寄与することができたことが、今回の業務の一番の喜びでした。関係の皆様には、様々なご助力・ご指導を頂き、有難うございました。いつかまたスーダンで再びご一緒させて頂くことを願っております。



## 七条 寛 専門家

### (「水供給人材育成計画プロジェクト」)

国営水公社研修センター(PWCT)にて機材管理システム構築の業務を担当しました。

カウンターパートと共に千点近くある機材を整理し、よりよい機材管理方法を考える日々でした。これからもカウンターパートが機材に対して愛着を持って、管理してくれと思っております。また、今回の業務は私にとっても大変貴重な経験となりました。JICAスーダン事務所の皆様、同僚、PWCT関係者の方々には大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。有り難うございました。



## 石垣 真奈 専門家

### (「『農業再活性化計画』実施能力強化プロジェクト」)

研修計画の短期専門家として2ヶ月間お世話になりました。担当分野では、対象部局へのキャパシティアセスメントやワークショップを通じて農業省の4年間のキャパシティビルディング活動計画を策定致しました。

当初、C/Pとのすれ違いもありましたが、今では農業省の多くの職員が8月から始まるJICAの研修に大きな期待を持ってくれるようになりました。今後ともC/Pの自主性を大切にしながら、農業省の能力開発が進むよう願っております。



## 石井 満美 専門家

### (「フロントライン母子保健強化プロジェクト」)

村落助産師の能力向上を目的とした本プロジェクトで、1ヶ月という短い期間でしたがコミュニティ強化を担当しました。セナール州にある4つのモデル村は助産師の能力も村人の産前検診に対する考えも様々で、各村に合った啓発活動を行うべく試行錯誤を重ねた毎日でした。ある村での活動中、草鞋のように泥のこびりついた私の靴から泥を落とそうと、いつまでも手伝ってくれた助産師達の優しさは忘れられません。お世話になった一人一人に心から御礼申し上げます。

## 阿部次長 離任のご挨拶

JICA事務所の阿部次長が、ご家庭の事情にて急遽スーダンを離れることになりました。(7/11日付 スーダン離任)

みなさんこんにちは。事務所次長の阿部です。突然ですが、このたび離任のご挨拶をさせていただくこととなりました。

スーダンでの勤務は1年2ヶ月足らずとなりましたが、噂どおりの暑さだけでなく冬場はとても涼しいこと、そして何よりもスーダン人の人の良さやこの国の秘めた可能性など実際に住んでみないとわからないスーダンの姿をいろいろ知ることができました。

本来ならばこれまでお世話になったお一人おひとりに直接ご挨拶しなければならぬところではありますが、何分急なこととなってしまったこともあり、この場をお借りしてご挨拶させていただき非礼をお許しください。帰国後は本部(国内事業部)での勤務となりますので、日本より皆様をサポートさせていただきたいと思っております。末筆ながら、皆様の今後のご活躍を心よりお祈りしております。健康にはくれぐれもご留意ください。本当にありがとうございました。

阿部 幸生 JICAスーダン駐在員事務所次長

# My Favorite

## ハルツームで乗馬

## 山田 幸 企画調査員 (JICA事務所)

娯楽の少ないハルツームですが、私の週末の楽しみは乗馬です。毎週金曜日、ハルツームノースにある乗馬クラブに通っています。先生のジェーン・アンは少し気の強い、イギリス人の女性です。一見怖いお母さん、という感じですが、愛嬌もある楽しい人です。20年ほど前にスーダン人の旦那さんと結婚してからほとんど故郷に帰らず、乗馬を教えながら8人の子どもに囲まれて暮らしています。

ジェーンは結婚したばかりの頃、ハルツームで何もすることがなく、異国での暮らしに不安を抱えていました。そんなとき、突然旦那さん

から「いいところに連れて行くから。」と言われ、連れて行かれたのは何も無い郊外の砂地。「私はここで捨てられてしまうのかもしれない!もう生活に不満なんて言わないから。神様、どうかここに置き去りにされませんように・・・!」とジェーンは必死に心の中で祈ったそうです。しばらくすると、遠くに馬が繋がれているのが見えてきて、「この馬を飼ってイギリスで好きだった乗馬を教えてくださいませんか?」と旦那さん。夢を見ているくらい嬉しかったそうです。それから少しずつ馬の数を増やしていき、今では20頭以上を保有しており、毎日朝と夕方、外国人やスーダン人の子どもたちにレッスンをしています。



5月のある週末、私はいつも通り乗馬仲間とジェーンの所へ。その日、私の相棒・トワイライト(♂)はご機嫌斜めで、いくら“進め”の合図をしても立ち止まったりのろろ歩いたり。馬はその日の天候や体調ですぐに機嫌が変わります。一方、Nさんの方の馬は大張り切りで、合図もしないのに駆け足しています。時代劇の侍みたいにかっぱかっかと気持ちよさそうです。

1週間の仕事の後、週末の夕方に馬に乗って颯爽と駆けるのが、私のリフレッシュ法。見慣れたハルツームの町も、また違った風景に見えるから不思議です。興味のある方は、ご紹介しますので、ぜひ声をかけてください。

## 編集後記

ハルツームにも、雨の季節がやってきて、ずいぶん涼しくなりました。また、7・8月はハルツームを離れる方も多く、変化の少ないスーダン生活においても、季節の移り変わりを感じます。

次号は9月です。

JICA Sudan News Letter/vol.1  
JICA Sudan Office  
House#14, Block #10, St.49  
Amarat, Khartoum, Sudan

発行: 広報担当